

Title	<紹介>コーンフォード著 大沼忠弘 左近司祥子訳 トゥー キューディデース：神話的歴史家
Author(s)	新村, 祐一郎
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1970), 53(3): 441-442
Issue Date	1970-05-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_53_441
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

國衙の税所の職を世襲し、常陸大塚家と姻戚關係をもつ税所氏の文書であり、とくに弘安二年（一二七九）の作田惣勘文は「常陸國太田文」（統群書類従）の原本で、常陸國衙によって作成されたものと見られ、大田文の作成、常陸の郡荘域の確定、中世村落史の好史料である。鎌倉時代、信濃の豪族であった臼田氏が、南北朝時代、常陸稲敷郡に居を移し、近世初期に百姓となる迄の波瀾に富む歴史は、「臼田文書」に伝えられている。寺院關係では、「円密院文書」があり、南北朝期以来の関東における天台宗檀那流、恵心流の教線拡大の状況、信太荘の実態を示す貴重な史料である。

その他、公武の徳政に関する重要史料を含む「常陸國総社宮文書」をはじめ、「日輪寺文書」「法雲寺文書」等についてもふれて見たいが、すでに紙数も尽きてしまった。

常陸における文書集の編纂は、江戸時代以来盛んに行なわれてきたが、現在それは一般に写本の形で存在している。今回それが公刊され、利用し易くなったばかりか、

調査によって発見された原本によって刊行された部分の少なくないことは、本書が今日の古文書研究の最高水準に立つ文書集であることを示している。

吉田神社、薬王院等の古文書を含むと考えられる第二巻以下の続刊が、大いに鶴首されるところである。

（B5版五〇三頁、昭和四五年三月、茨城県刊、頒価三、〇〇〇円、なお申込先は水戸市三の九二丁目、県立図書館内茨城県史編さん室）
（上横手雅敬）

コーンフォード著

大沼忠弘訳
左近司祥子

トゥーキーデーデース

—— 神話的历史家 ——

原著は一九〇七年に刊行され、「ロハ、リスン女史に献呈されている。本書の意図するところは、懐疑的批判的精神が旺盛だとするトゥーキーデーデースに対する在来の通説的な解釈に反論することである。そのため本訳書末尾の訳者解題にもある通

り、刊行当初より学界から好意をもってはむかえられず、近年に至るもなお、本書を反駁する議論があつたと断たない。しかし、裏を返せば、それは本書の存在価値が今なお失なわれていないことを示しており、一九六五年に原著が覆刻され、今また邦訳が出たこともそれを示すものであろう。

序文によると、著者の目的はトゥーキーデーデースの「歴史」の「真骨頂」というべき芸術的局面を明らかにすることにある。内容は、第一部「歴史家トゥーキーデーデース」と第二部「神話家トゥーキーデーデース」とに分かれているが、もちろん、一貫した主題を追及したものである。

第一部はペロポネソス戦争原因考ともいうべきもので、著者コーンフォードはトゥーキーデーデースのあげている説明には満足せず、みずから原因についての仮説を立てている。すなわち以下のようなものである。戦争を意図したのは、ペリクレースの支持層の中枢をなすペライエウスの新興工商業者であつて、彼らの強い要求をペリクレースはうけいれざるを得なかったの

だ。彼らは西方へ向う貿易行路がすべてコ
リントスを経由しているのに満足せず、メ
ガラ地峡をアテナイの支配下におき、貿易
の主導権を得て西方シケリア方面までの通
路を得ることを目指している。だからアテ
ナイにとって、攻撃の近くの目標はコリン
トス、遠くの目標はシケリアであるが、コ
リントスはメガラを通してのみ攻略し得る。
そこで対メガラ強硬策とシケリア遠征とは
深いつながりがある。

ざっと以上のようなコンソフオードの仮
説とトゥーキューディデースのいう原因と
は大いにはなれてはいるが、著者は『歴
史』の第一巻は戦争勃発の原因ではなく口
実を述べたに過ぎず、彼の意図は観察され
た行動(出来事)と申し立てられた動機(演
説)とを記録することにあつた、という。

第二部が序文でいうところの「芸術的局
面」をとりあつたものである。すなわ
ち、彼の詩人乃至芸術家的な天分があきら
かになるのは神話的歴史としての部分にお
いてであり、そのような部分のいくつかが
例示されている。その叙述を通じて著者は、

次のような結論を引き出している。トゥー
キューディデースはシケリア遠征の「原因」
をたずねて、第四巻から第七巻まで「原因」
の連鎖がつづいていることをつきとめた。

更に遡れば第三巻までは行けようが、それ
以上原因の連鎖を求めて遡ることはできな
い。ところで彼は一連の神話的原因の先入
観念にとらわれていたために、シケリア遠
征計画を戦争の起因に結びつけることがで
きなかった。これを結びつけるには経済的
状況の諸要因に気づかなければ不可能だが、
トゥーキューディデースはそれに気づかなか
ったのである。要するに、彼の精神が自
分の目撃した事件を一定の形式にはめこん
でしまうような、様々な先入観によって満
たされていたので、戦争の真の起因が彼に
は理解できなかったのである。

(B6版三七六頁 昭和四五年二月 みすず
書房刊 定価一、〇〇〇円)

(新村祐一郎)